

<目的> おしゃれに対する興味、関心は年々低年齢化してきているが、小学生時代は高学年になるにつれて、おしゃれ意識の変化は特に大きいと考えられる。ここでは小学6年生と3年生を対象に、衣生活に関する調査を通して、学年差、男女差の面からおしゃれ意識について考察した。

<方法> 関東地区の小学校に通う学童384名(6年生;男子106名,女子72名,3年生104名,女子82名)を対象に、1999年12月に質問紙法による調査を実施した。調査内容は、通学服の選択方法、洋服の購入方法、洋服(7種類)の好み、日常のおしゃれや洋服の興味に関する質問(11項目)などである。なお、回答のしやすさから主として2件法(好き・嫌い,はい・いいえ)を用いた。

<結果> 通学服の選択は3年生では、男子は「親が決める」、女子は「自分が決める」、6年生では、男女共に「自分が決める」の割合が高かった。洋服の購入は全体的に「親が買う」、または「親と一緒に買う」が多かった。洋服の好み、日常のおしゃれや洋服の興味については、母比率の差の検定により、学年差、男女差を検討した。その結果、有意差の多くみられたものは「かわいらしい洋服」、「おとなっぽいや洋服」であり、前者については、男子よりも女子が、女子では3年生よりも6年生が、後者については、男女ともに3年生よりも6年生が、6年生では男子よりも女子が好きと回答する割合が高かった。また、日常の着装行動については、おしゃれ意識は男子よりも女子、女子では3年生よりも6年生の方が高いものが多いが、男子では学年差による違いはほとんど見られなかった。